

ラホヤ村通信

(8)

高垣愉佳

我ら海の民

不動産屋兼大学教授のエレーナさんに誘われてギリシャ料理屋へ行った時の事。「サーフィンはやるの？」とエレーナが話を切り出した。「サーフィンは色々道具を買いそろえないといけないからやってないけど、サーフボードは買って、月に 2 回以上はビーチに行ってるよ。」と答えると、「二人とも泳げるんだあ〜。」と驚くので、「まあ。そんなに上手じゃないけどね。」と答えた。「どれくらい泳げるの？」と聞くので、「う〜ん、2〜300メートルくらいかな？」と答えた所で、エレーナのフォークの動きが止まった。視線を感じたので隣のテーブルに目をやると隣のテーブルの家族も全員驚いたようにこちらを見ている。「2〜300メートルって、どこでそんなに泳ぎを習ったの？」とエレーナ。「学校の体育の時間だよ。日本の学校にはほとんどどこでもプールがあって、夏は泳ぎを習うんだよ。だから、多分ほとんどの日本人がこれくらいは泳げると思うよ。私たちが特に泳ぎが上手いというわけではないよ。」と言うと、エレーナは信じられないという顔で顔を左右に振っていた。先ほどから視線を感じる隣のテーブルの家族はと言うと、「口、空いてますよ！」と言いそうになるくらい驚いた顔を

している。彼らのリアクションにこちらが驚いてしまった。皆が泳げるというのは日本以外ではそれほど驚くような事なのだという事を初めて知った。そういえば、アメリカの学校を見ているとプールの無い学校がたくさんあった。日本は四方を海に囲まれた海洋国だ。だから体育のカリキュラムにもれなく水泳が組み込まれているのだろうという事を初めて理解した。数学や何やら難しい事も生きて行く上で必要だが、よく考えてみれば泳ぐという技術は非常時に役に立つし、まだ飛行機や電車がメインの移動手段ではなく、海や川を船で移動した時代にはなおのこと身につけておく必要のあるものだったのだろう。我ら海の民、水泳万歳だ。

医療に大切なもの

知人が勤めている病院を見学させてもらう機会に恵まれた。日本で言えば日赤にもひけを取らない程の大きな病院だった。

その日はプロの大道芸人がボランティアで病室を回る日だったため、大道芸人さんに同行させてもらった。ベッド上から動けない程の状態の方の部屋一つ一つを回って、ボールを使った芸やちょっとしたマジックとプチトークをして回られる。

当日は患者さんが一名行方不明になるというハプニングがあったため、当初予定されていた看護師さん達とのディスカッションの予定が無くなったのは残念だった。見学させてもらった病棟の設備自体は、正直に言うと日本の大病院の方が最新の設備を備えていた。ただし、ディスプレイ製品と精密医療機器を除いて。日本の病院は不必要な部分まで常に最新にする事に専念しているのかもしれないと思った。案内してくれた人は、「数年前にトヨタの改善システムを導入してから、とても仕事の効率が良くなった。今では『現場』という日本語を聞けばみんな意味が分かるようになったのよ。何かハプニングが起こるとみんな let's go to the Genba! って言って走って行くようになったわ。」と笑っていた。

病院で働く医療従事者、特にナースは圧倒的にフィリピンからの移民が多いという事だった。フィリピンは地震や台風で大きな被害を受ける事がよくある。そのような時、病院はいち早くフィリピン政府に多額の資金援助をするらしい。なぜなら、母国が天災に見舞われた事で職員が心を痛めすぎるような事があれば、患者さん達に良いケアを提供する事が出来なくなるから。このように職員を気遣う事で、回り回って病院のケアの質を高めると考えているからだという事だった。

医療に大切なものは何なのか？それはやはり人ではないか。どんなに高性能な医療機器も使うのは人であり、データを解釈するのも人であり、それを伝え、また治療を決意して受ける相手もやはり人である。

そんな事を考えながら、フリースペースで患者さんのご家族に折り紙を教えながら

話したり、初めて手にするハープを鳴らしてみたりした。このハープは音楽セラピーで使用している物だという事だった。知人の紹介とはいえ、英語が堪能では無い外国人の見学訪問を快く受け入れ、見学に際して相当な自由を与えられた事に感謝しつつ驚きながら。日本で病院を見学したとして、どのようなものになるだろうか。恐らく、置いてあるハープを手にした瞬間に、お叱りを受けるのではないだろうかと思う。



病院内のフリースペースで

名刺交換

日本で何かの集まりがあり、人と出会った時、まずは名刺交換から始まる事が多い。日本の大学やハローワークなどでは名刺の受け渡し方などというマナー講座まで開かれている位だ。では、日本以外ではどうなのか？というのと、日本以外の人達も名刺は持っている。ただ、違う点は、彼らは出会ってすぐに名刺を渡してお互いの所属や肩書を確認してから話を始めるという道筋は取らない。彼らが名刺を出すのは別れ際だ。アメリカ等での集まりやパーティーの多くは立食式だ。適当にその辺に居る人や話してみたいなという気になった人とちょっと話をする所から始まる。名前と出身地くらいは伝えるが、いきなり所属や肩書などの話から入る事はあまり無い。試しに、日本

式にまず名刺を渡して所属と肩書から自己紹介をしてみれば分かるが、その時点で相手は興味を失って会話からフェードアウトして行く事が多い。幸いな事に、私には所属も肩書も無かった。なので、自己紹介しようにも「日本から来て、今はサンディエゴに住んでるユカです。」以外に紹介のしようが無かった。日本の集まりやパーティーでこのような紹介の仕方をすれば、おそらく「よく分からない、ちょっと変わった怪しげな人」と認識されて敬遠されるのではないかという気がするが、幸いな事にこれが向こうのやり方には合っていたようで、興味を持ってもらう事が出来、大抵はその後の会話がスムーズに進んだ。そして、別れ際に「今日は楽しかったよ。うちの国に来る時にはいつでも連絡してね。ご飯をごちそうするよ。」と名刺をもらう事も何度かあった。中にはもらった名刺を見てびっくりぼん！な肩書の方もおられた。初めに名刺をもらっていたら、自分とは関係無い方だという偏見をもって接して、恐らく話しもしなかつただろうと思う。名刺の使い方の違いを通して人と人が出会うとはどういう事かを考えさせられた。



立食形式のパーティーの様子

教材にも漂う空気

A:I want to apologize to you.

私あんたに謝りたいねん。

B:What for?

なにを？

A:You must have been very angry with me yesterday.

あんた昨日私にめっちゃ怒ってたやろ？

B:I don't understand.Why should I have been angry with you?

分からんわ。何で私があんたに怒らなあかんのか？

A:Don't you remember?We had planned to see a movie yesterday,but I completely forgot!

あんた覚えてないの？私ら昨日映画見に行こうって計画してたやん、せやけど私完全に忘れててん！

B:Don't worry about it.Actually,I owe you an apology.

そのことは気にせんでええよ。実際私もあんたに謝らなあかんし。

A:You do? Why?

あんたが？何で？

B:I couldn't have seen a movie with you anyway.I had to take care of my little sister yesterday,and I completely forgot to tell you.私どっちにしてもあんたと映画見に行かれへんかってん。昨日、私の妹の面倒みなあかんくてな、で、私あんたに言うの完全に忘れてん。

A:That's okay.May be we can see a movie some other time.

そら良かった。ほなまた別の時に私ら映画見に行けるやん。

関西出身の私の頭の中では、全ての英語が瞬時に関西弁のニュアンスで理解されていくので、このような訳になる。でも、この教材がコミカルに感じられるのは、私の訳が関西弁訳だからだけではないような気がしてならない。日本の教育の中で使用される英語の教材は、内容自体が極めて真面目な事が多いように思う。読んだ後にくすっと笑ってしまうような楽しみがある方が、何語を学習するのであっても楽しいような気がするのだが。しかし、教材から漂って来る、この少しのいい加減さと妙なプラス思考。この空気感は狙って教材に組み込まれたものだとは思われない。これは、確かにアメリカで感じたものと同じだった。